

文化

H26.10.6、北海道新聞(夕刊)

「北の墓」を刊行して

合田 一道

この夏に「幕末群像の墓を巡る」を出版した。墓からその時代を遡ると何が見えるか。長い間追いつめてきたテーマだった。

それに先駆けて「北の墓 歴史と人物を訪ねて(上・下)」も刊行した。こちらは道新文化センター「二道塾」の塾生たちと話し合い、取材、執筆したものである。北海道では初めての「墓の本」だけに、やる気満々でスタートした。

本の構成は、黎明期から明治、大正までを上巻、昭和戦前と戦後、平成を下巻にした。膨大な数から候補を絞り、墓を探して写真を撮り、文章を書く。ところろがいきなりつまずいた。実際に墓にたどり着くまでが容易でない。3度目の取材でやっと見つけて大喜びすることさえあった。

もっとも難儀したのは戒名の確認で、家族でも意外に把握していない。最後まで判明せず、断念するケースもあった。墓は

聖域なので取材はお断りという方、書かれたら墓石が削られると悩む著名人の末裔の訴えなど、思いがけない反応に戸惑いながら、墓に替えて別なものを紹介するなど工夫をした。

墓の取材で、北海道という地域の特殊性を実感した。黎明期に多くの人々が津軽海峡を越え、蝦夷地と呼ばれた北の大地を踏んだ。高田屋嘉兵衛の墓は函館にもあるが、伊能忠敬、近藤重蔵、間宮林蔵、松浦武四郎ら、北海道と名を変えて後の、開拓判官の島義勇、開拓長官の

黒田清隆、初代北海道庁長官の岩村通俊など名だたる人たちは、東京はじめ全国各地に眠っていた。

行きつ戻りつする取材の中で、北海道の歴史が多くの先人たちにより築かれ、育まれた事実を、あらためて突きつけられた気がした。

も骨のない墓なのである。

野球チーム「函館大洋倶楽部」の久慈次郎は1939年(昭和14年)8月、札幌・外苑球場(現在の円山球場)で開かれた全道樺太実業野球大会の試合で、捕手の送球を頭部に受けて昏倒、亡くなった。函館の称名寺に建つ墓は、丸いボール形、骨入れ

多くの先人刻んだ歴史 再認識

道内に葬られている人も数多い。わが国初の種痘を施した中川五郎治、「屯田兵の父」といわれた永山武四郎、伊達を開いた伊達邦成、漂泊の歌人の石川啄木、アイヌ神謡をまとめた知里幸恵、拷問死した小林多喜二、「空の軍神」とつたわれた加藤

建夫、昭和新山を守り抜いた三松正夫、ニッカウチスキーを作った竹鶴政孝、コメディアンの前田喜頓などである。

遺骨のない墓もある。箱館戦争で戦死した土方歳三の墓は函館と東京・日野にもあるが、遺体はいまだ特定できず、どちら

口はミット形、花立てはバット形。妻が建立したものだ。この時、身もついていた妻は、生まれたわが子に夫と同じ名をつけた。そんなドラマが眠っている墓前に立つと、不思議な感慨がこみ上げてきて、思わず合掌した。

(ごうだ・いちぢうノンフィクシオン作家)

合田一道・二道塾「北の墓 歴史と人物を訪ねて(上・下)」は柏艸舎刊、各巻1944円。合田一道「幕末群像の墓を巡る」は青弓社刊、1728円。



久慈次郎の墓 函館・称名寺